

平成8年度

学校教育相談の活性化を目指して

—学校における相談活動の実態について—

川崎市総合教育センター 教育相談Ⅱ研究会議

学校教育相談の活性化を目指して

— 学校における相談活動の実態について —

教育相談Ⅱ

伊藤 一晴¹

渡邊 寿枝²

新井 紀代美³

本田 徳宏⁴

中嶋 はるみ⁵

株本 秀信⁶

(平成7年度)

要 約

最近の社会の著しい変化は、子どもたちの世界にも大きな影響を与えている。学校においては、いじめや不登校、非行などの深刻な問題が多発し、その対応に苦慮する場面も出てきている。このような現状を打開するため、子どもたちへの一層きめ細かい配慮が求められている。その具体策の1つとして、学校における教師の相談活動が注目され、積極的にその推進が図られつつある。しかし、学校で直接子どもたちに接している教師はこの相談活動をどのように理解し、捉えているのだろうか。また子どもたちはどの程度の相談要求を持っているのだろうか。

本研究では、学校における教育相談を学校教育相談とし、その内容及び独自性を明らかにした。また、「生徒と教師の心的距離」「教師の学校教育相談の捉え方」「学校教育相談の実状」を調査した。その結果、教師と生徒とのかかわりにおいて極端な心的距離はないが、やや一面的なかかわりも見られた。実態調査結果では相談を希望した生徒、あるいは実際に相談した生徒は全体の4割以上という値を示した。また、いじめに関する相談では、担任を選択する生徒の数も多いことが判明した。一方、学校教育相談の必要性を感じている教師の数も多いことがわかった。今後の課題としては、より具体的な心的距離の調査法の開発や、心的距離の調査を活かした学級経営等の事例研究、学校生活の具体的な場面で教育相談的手法を活かした子どもへのかかわり等の事例研究が上げられる。

キーワード：教育相談、学校教育相談、心的距離、

目 次

はじめに

I 主題設定の理由	30	2. 学校教育相談の独自性	31
II 研究の方法	30	3. 調査の概要	32
1. 仮説とその設定理由	30	4. 本調査について	32
2. 研究の方法	30	5. 調査結果の考察	33
III 研究の内容	30	IV まとめと今後の課題	39
1. 学校教育相談の定義	30	おわりに	40
		・引用、参考文献	
		・指導助言者	

¹川崎市立王禅寺中学校（主任研修員）

²川崎市立長尾小学校（研修員）

³川崎市立有馬中学校（研修員）

⁴川崎市立川崎総合科学高等学校（研修員）

⁵川崎市総合教育センター研修指導主事

⁶川崎市立久本小学校（前川崎市総合教育センター研修指導主事）

はじめに

最近の社会の著しい変化は、子どもたちの世界にも大きな影響を与えている。学校においては、いじめや不登校、非行の問題等を抱え、それらの増加は内容の深刻さも併せ大きな社会問題になっている。

このような現状に対応するため、平成8年5月には第15期中央教育審議会の「審議のまとめ」が報告され、いじめ問題、不登校問題への対応など、子どもたちの心のケアが一層求められている。そして、すべての教師に基礎的なカウンセリング能力の育成・充実を図ることや、養護教諭についても、採用時の研修をはじめとする現職研修時において、カウンセリング能力の充実を図ることが提言されている。

I 主題設定の理由

学校教育相談の活性化を目指して

— 学校における相談活動の実態について —

子どもたちを取り巻く環境が大きく変化してきている現在、困難に直面した子どもたちが自ら考え、前向きな思考によってその問題を解決していくための基礎的な力を育成することが求められている。学校における教師による相談活動はその一翼を担うものであり、求められる期待は大きい。しかし、学校で直接子どもたちに接している教師はこの相談活動をどのように理解し、捉えているのだろうか。また、子どもたちはどの程度の相談要求を持っているのだろうか。

そこで私たちは研究主題を「学校教育相談の活性化を目指して」と設定し、今必要性が叫ばれている学校における教育相談の役割とは何か。また、教師や子どもたちは、本当に教育相談の必要性を感じているのか。そして学校でどのような相談活動が行われ、教師や子どもたちはそれをどのように捉えているのかを把握するため、副題を「学校における相談活動の実態について」と定めた。

II 研究の方法

1. 仮説とその設定理由

「学校教育相談の活性化を目指して」という研究主題の下に、私たちは次のような仮説を立て、文献等の研究や、調査を通して実証したい。

1. 学校における子どもと教師のかかわりには、心的距離がある。
2. 学校生活において、教師は相談活動の有効性や必要性を感じている。

2. 研究の方法

1年次は、学校教育相談についての定義付けを行った。また、学校教育相談と専門機関における教育相談との相違を比較や文献等によって探り、学校教育相談が持つ独自性を明らかにした。学校における教育相談活動の実態調査については、目的・内容を考え、予備調査用紙を作成し、実施・回収・集計まで行った。予備調査の分析及び考察、そしてそれに基づく本調査用紙の作成から実施・分析及び考察については2年次の研究内容とした。

2年間の研究の経緯と方法は以下の通りである。

- ①文献等を参考にして、学校教育相談についての定義付けを行なう。
- ②専門機関における教育相談との比較や、文献等から学校教育相談の持つ独自性を探る。
- ③調査の目的を定め、調査項目の構成をする。
- ④調査用紙を作成し、予備調査を実施する。
- ⑤予備調査の分析から、調査項目や選択肢の検討を行い本調査用紙を作成する。
- ⑥市内中学校生徒・教師を対象に本調査を実施し、回収する。
- ⑦データの入力・クリーニング後、単純集計、属性によるクロス集計を行う。
- ⑧5件法の調査項目は因子分析にかけ、多重回答の調査項目についてはクラスター分析にかけ分類する。
- ⑨生徒と教師、あるいは属性でのデータの比較について検定を行い、その有意性を確認する。
- ⑩分析結果を考察し、仮説との関係を明らかにし今後の課題を探る。

なお、①～④が1年次、⑤～⑩が2年次の研究の方法である。データ分析については、すべて統計処理ソフトSPSSを用いて行った。

III 研究の内容

1. 「学校教育相談」の定義

学校教育相談について、一本化された定義付けはないが、先行研究や文献によってその捉え方を探った。

教育相談は、扱う対象が「教育上の諸問題」であるが、原野氏は、その組織や方法の違いによって教育相談を大きく四つに分け、その一つに学校教育相談を位置付けて

いる。そこでは、¹⁾「学校という教育の場で行う教育相談」。これについてはさらに、「学校の教師によって行われるもの」としている。

その他の三項目については、²⁾「教育センター等で行う教育相談」「児童福祉法に基づく児童相談所等で行う教育相談」、「民間の個人や団体で行う教育相談」をあげているが、これらは専門機関による治療的教育相談であると捉えることができる。

文部省が1981年に示した『生徒指導の手引き』では、学校教育相談については、³⁾「一人ひとりの児童生徒の教育の望ましいあり方について助言指導することを意味する。言いかえれば、個人のもつ悩みや困難の解決を援助することによって、その生活によく適応させ、人格の成長への援助をはかろうとするものである」と定義されている。

そこで本研究会議では下記のように捉え、研究の推進に当たることとした。

学校教育相談とは、学校という教育の場で学校の教師が行う開発的、予防的、治療的教育相談をいう。全ての児童生徒及びその保護者を対象とし、一人一人の子どもの自己実現、社会的適応ができるよう援助することである。

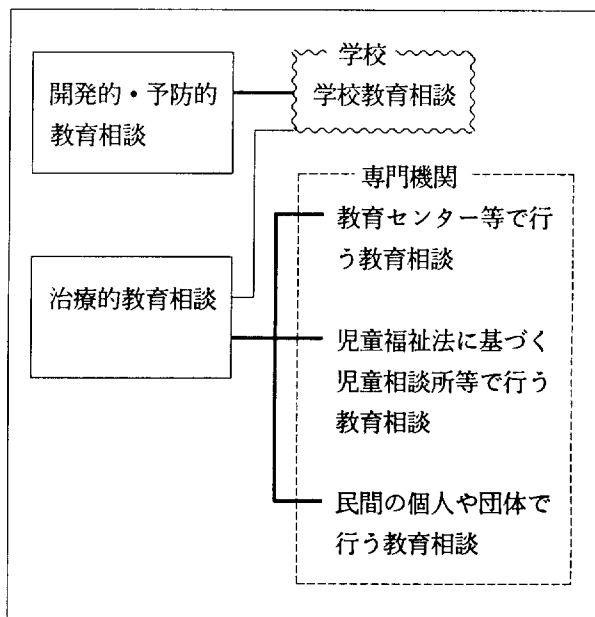
学校教育相談の活動内容については、⁴⁾「多くの生徒が出会う問題を予測し、前もって援助したり、学習スキルや対人関係が円滑に適応・発達していくよう人格的成長を援助していくことを目標とした予防的・開発的教育相談」と「心理的・行動的問題から学校生活に適応できない(しない)児童生徒を主に対象とし、その問題の解決を援助していく治療的教育相談」とに分けることができる。

予防的・開発的教育相談は、時間や場所を決めて行う個別相談のみにとられず、小グループやクラス等、状況に応じた対応がなされるものである。

一方、治療的教育相談は、心理的・行動的問題を抱えている特定の児童生徒が対象となる。そのため、中には深刻な問題に対応しなければならないこともあり、ある程度の専門的な知識や技能の修得、専門機関との連携も重要になってくる。そして、相談担当者は他の教師や保護者の理解や協力を求める姿勢が必要である。それが相談活動に対して、理解や協力を得ることにつながる。

下記の(図1)は、ここで述べたことを図式化したものである。

【図1】学校教育相談の位置付け



2. 学校教育相談の独自性

(1) 専門機関における教育相談との相違

一般的に学校教育相談という治療的教育相談の方をイメージしがちである。そのため、専門機関の教育相談で行われている技法や理論をそのまま用いようとする傾向がある。

先にも記したように、学校教育相談の内容としては、予防的・開発的側面と治療的側面の二面があり、むしろ前者の比重が教育の場である学校においては大きい。また、進路相談や学習相談といった内容では、アドバイス等、指示的・援助的相談も多い。

そこで、教育の場である学校で行われる相談活動と専門機関で行われる相談活動の相違を知ることによって学校教育相談の独自の面が明らかになり、専門機関で用いられている理論や技法も、学校において生かされてくるのではないかと考える。

(2) 学校教育相談の視点

学校教育相談は、学校の担う本来の教育活動と重なり合う部分が非常に多い。それは、学校生活における教師と子どものかかわりの中から生まれてくる活動だからである。そのため、日常の教師と子どものかかわりが相談活動に大きく影響してくる。

^{1) 2)} 教職研修臨時増刊号 NO. 3「カウンセリング読本」 P 30

学校教育相談とカウンセリング

原野広太郎 教育開発研究所 (1983年)

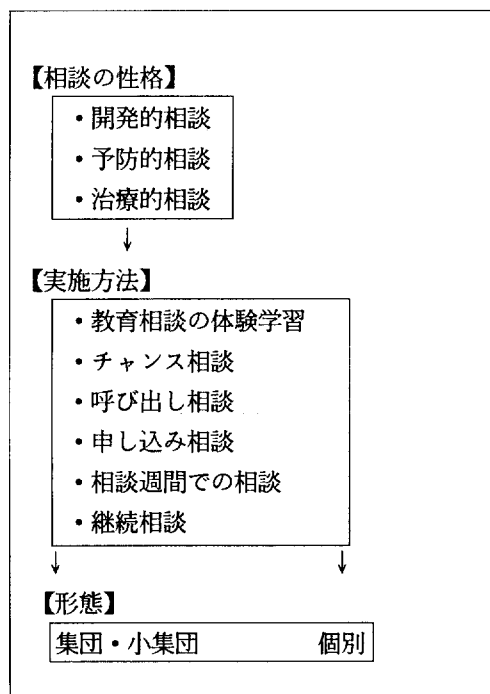
³⁾ 学校における教育相談の考え方・進め方

文部省 (1990年)

⁴⁾ 新教育心理学体系 ④「学校カウンセリング」P 104~105 大山正博 中央法規出版 (1993年)

例えば、必ずしもモチベーションが高いとはいえない子どもとも、それまでのかかわりが良好なものであれば継続的な相談も可能である。つまりかかわり次第で、全ての教育活動が教育相談的姿勢や手法を活かした教育活動ができるということであり、そこでは相談研修で得た理論や技法を活かすことができるのではないかと考える。そして、教育相談を実施したときにも、余裕を持った対応ができるのではないだろうか。

【図2】学校教育相談の内容



3. 調査の概要

(1) 調査の目的

学校生活における、生徒と教師の意識の違いを知ることによって、両者がかかわりを持つ上で障害となるような心的距離があるのかを探る。また、学校教育相談活動を教師はどのような概念で捉えているのか。そして、学校教育相談活動に関する実態を明らかにすることによって、そこから学校教育相談の持つ有効性や必要性を探りたい。

(2) 調査の内容

①調査項目の構成

生徒と教師それぞれに質問紙を作成した。まず、調査の目的から第1に「生徒と教師の関係」に着目し両者の心的距離を探ることで関係を明らかにしたいと考え、共通内容によって構成した。ここで言う心的距離とは、生徒と教師両者の信頼度、及び事象に対する見方、受けとめ方の相違と定義した。第2に現在の学校教育相談活動の実態を知ることによって、学校教育相談の現状や今後

の展望を探りたい。また、現状をより深く探るため、調査対象者の属性も加えた。

(3) 予備調査について

- ①調査目的：本調査の設問・選択肢作成の資料を得る。
 - ②調査方法：質問紙（5件法・選択肢法）
 - ③調査対象：中学校2校 生徒266名
 （学年の内訳）1年生 128名 2年生 138名
 （性別の内訳） 男子 143名 女子 123名
 中学校2校 教師 45名
 （性別の内訳）男性教師 29名 女性教師 16名
- 予備調査の結果、生徒と教師の心的距離を知る設問がしっかり対応したものとなっていなかったため、意図した結果が得られなかった。設問をすべて対応したものに修正した。また、選択肢による設問では、選択数を限定しない多重回答を用いたため、無回答の欄が多数出て分析しづらく、回答数を限定することにした。そして、予備調査で深く実態に迫ることのできなかった部分については、細分化した設問を用意したり、自由記述を取り入れ本調査用紙を完成させた。

4. 本調査について

(1) 本調査実施について

予備調査の分析結果及び考察から本調査内容を作成した。特に生徒と教師の意識の違いや、学校教育相談の現状を探れるよう配慮した。実施期間については、この調査の目的から本来ならば学級や学年が成熟する学年末に行いたかったが、予備調査の遅れから1学期末となった

- ①調査形式 自記式質問紙法（選択式、一部記述式）
- ②調査期間 平成8年7月8日～7月18日
- ③調査対象 川崎市立中学校の生徒及び教師
 - 生徒 7校 1438人
 （性別 男子 755人 女子 683人）
 - 教師 18校 522人
 （性別 男性 324人 女性 198人）
 - 管理職以外の教師

(2) 分析方法について

単純集計、クロス集計を行った。クロス集計は生徒の属性である性別・学年別、教師の属性である性別・年齢別・教職経験年数別に全項目で行った。

「生徒と教師の心的距離」を知るための、5件法による項目については因子分析による分類を行い、因子構造に型名を付け、型別に、平均値を属性によって比較・分析した。また、生徒の集計結果と教師の集計結果はマルチソフトを使い結合させ比較考察を行った。数値の差の検定には X^2 (カイ自乗)検定とT検定（いずれも $P < .05$ ）を用い、有意性を明らかにした。

また、選択肢法による多重回答項目のうち、2項目については、データの性質を知る上からいくつかのグルー

プに分類し考察を行うためクラスター分析を用いた。

5. 調査結果の考察

(1) 生徒と教師の心的距離

①生徒調査項目について

○因子分析による型分け

問2について、主因子解を算出しバリマックス回転を行い、最終的に4因子を抽出した。この因子を「心的距離」の要素として用いた。

因子分析によって導き出された4因子を検討し、次のように要素項目を設定した。

因子 1	・・・生徒と教師の相互交流
因子 2	・・・不信
因子 3	・・・信頼
因子 4	・・・相談の機会

教師との関係を知るこの4因子21項目について5件法での回答結果を平均値で表した。これをクロス集計結果をもとに考察した。(図3)において番号の前に○の付いたものが X^2 検定によって有意の差が認められたものである。

②教師調査項目について

生徒調査項目と同様の方法を用い、最終的に5因子を抽出した。

因子分析によって導き出された5因子を検討し、次のように要素項目を設定した。

因子 1	・・・ 生徒と教師の相互交流
因子 2	・・・ 不信
因子 3	・・・ 信頼
因子 4	・・・ 相談の機会
因子 5	・・・ 相談への躊躇

生徒の調査同様、21項目について5件法での回答結果を平均値で表した。

③生徒と教師の心的距離を知る

○生徒と教師の比較

生徒、教師それぞれ属性によって考察してきたが、この両者の心的距離を知るため、両者に共通する4因子18項目を取り出し平均値を比較し(図3)集計結果を基に考察した。そのため、教師の因子5 相談への躊躇を構成するT-21・T-16・T-20の3項目は除いた。

その結果、生徒の因子3 信頼は1項目減り3項目で、生徒の因子4 相談の機会は2項目減り2項目で構成することにした。表において番号の前に○のついたものがT検定によって有意の差が認められたものである。有意の差は18項目中13項目に認められ、3項目にやや有意の差

が認められた。

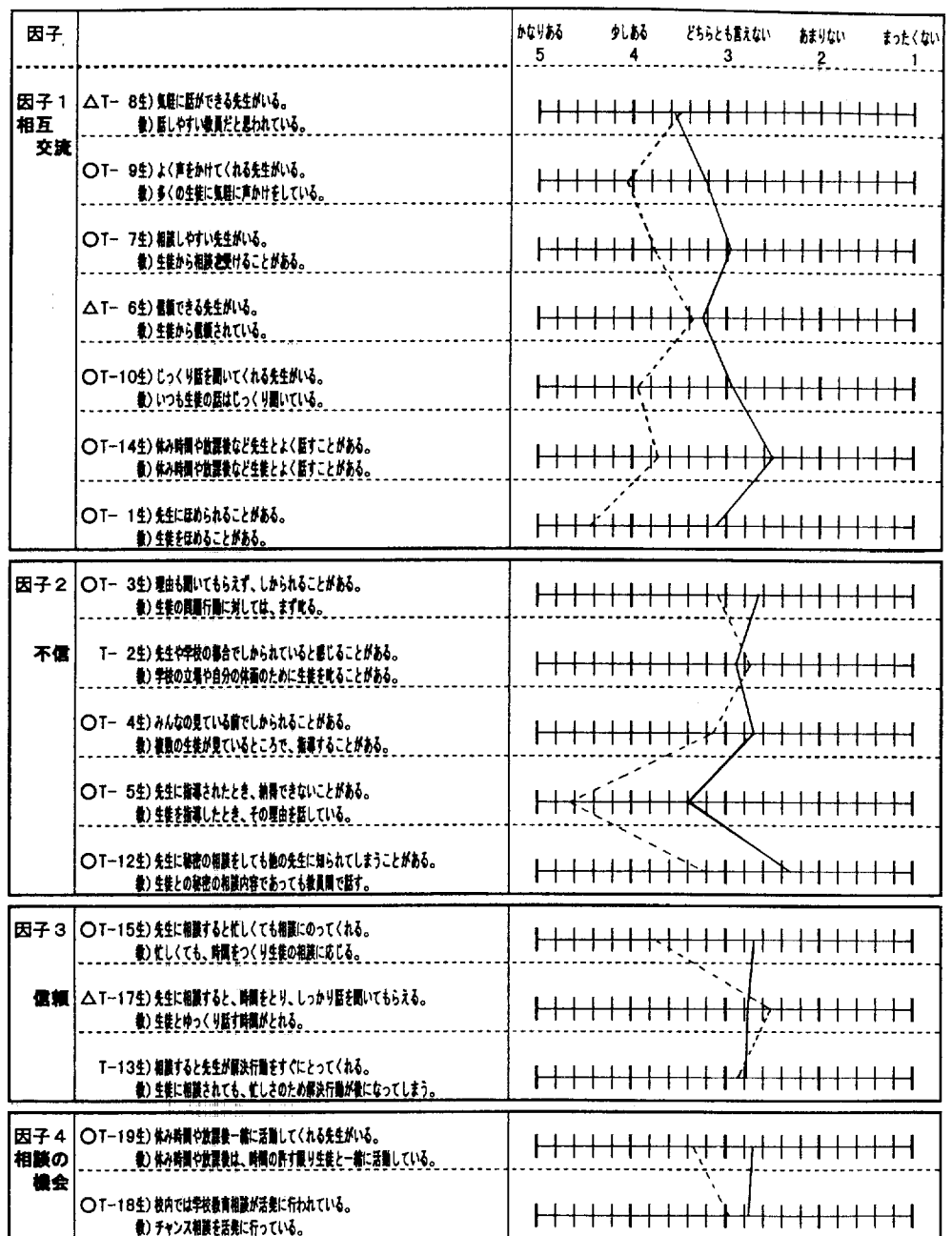
因子1 相互交流では、T-1「先生にほめられることがある」「生徒をほめることがある」では、両者に大きな差があり、教師がかなりあるで53%であるのに対し、生徒は3.8%と約50%の差になっている。生徒のほめられているという感じが満たされるには、もっと教師のほめるというかかわりに配慮が必要だと考えられる。また、T-9「よく声をかけてくれる先生がいる」「より多くの生徒に気軽に声かけをしている」という対応や、T-10「じっくり話を聞いてくれる先生がいる」「いつも生徒の話はじっくり聞いている」という対応でも、少しいる、かなりいるで両項目ともに生徒は教師よりも約40%低くなっている。これは、両者の感じ方に差があり、生徒はもっと親近感を求めていると言える。ただ、まったくない、あまりないの否定的回答がT-14以外で少ないのは、身近に信頼できる教師がいるのではないかということも考えられる。しかし、全体の結果としては、教師が生徒とかかわりを持つときの意識は、受ける側の生徒の意識とズレが生じている。

因子2 不信でも、生徒と教師の意識にズレが見られる。T-5で生徒が「先生に指導されたとき納得できないことがある」にややある、かなりあると約53%の回答があるのに対し、教師は「生徒を指導したときは、必ず理由を話している」にやや話している、かなり話しているを合わせて約90%の回答があった。また、T-12「先生に秘密の相談をしても他の先生に知られてしまうことがある」「生徒との秘密の相談内容であっても教員間で話す」でも意識のズレは他の項目に比べて大きい。これは、問題解決のため教師間で話し合いを持ったり、共通理解を図るためだと考えられるが、その後の生徒への接し方に一層の配慮が必要であることをうかがわせる結果である。因子3 信頼においても、意識のズレは認められる。T-15「先生に相談すると忙しくても相談にのってくれる」「忙しくても、時間をつくり生徒の相談に応じる」では両者の肯定回答に48%の差があった。今後、学校教育相談の活性化を図るためには、相談を希望する生徒が『先生は忙しいからだめだ』という気持ちに追いやることだけは、極力避けなければならないことである。

因子4 相談の機会では、日常的なかかわりが相談活動を進めていく上で必要なことであるという観点からみると、T-19「休み時間や放課後一緒に活動してくれる先生がいる」「休み時間や放課後は、時間の許す限り生徒と一緒に活動している」では、生徒が否定的回答であるのに対し、教師は肯定的な回答になっている。具体的にはまったくないで教師が1.2%であるのに対し、生徒では18.8%と17.6%の大きな差があった。また、肯定回答のかなりある・少しあるで、生徒は教師よりも22%低くな

【図3】生徒と教師の心的距離を知る比較

「生徒と教師の心的距離」を知る設問(1)



※ 番号の前の○印は有意の差が認められた項目。
△印は有意の差がやや認められた項目。

因子1 …… 信頼
因子2 …… 不信
因子3 …… 相談交流

っている。教師の働きかけがスムーズに生徒に受け入れられることの難しさがうかがわせる結果となっている。

以上の結果から、生徒と教師の間には意識のズレ即ち心的距離の大きいことがわかる。しかし、場面によっては心的距離が近いものもあり、今後多くの面でその距離を縮める努力が必要である。その視点として、生徒には性差、学年差があること、教師にも性差、年齢差、経験の差があることを踏まえ、教師は自分の置かれた位置等を考慮したかわり方を模索していく必要がある。また、教師が生徒とのかわりに自信をもって臨むことは大切なことだが、常にそのかわりについて省みる姿勢も忘れてはならない。

④修正のための調査

○生徒と教師の心的距離を知るための修正調査

本調査の分析結果及び考察から、生徒と教師の心的距離に、より客観性を持たせ学級経営等に活かすことができるよう、文章表現に修正を加え再度調査を実施した。なお、修正調査は、本調査で対象となった教師、生徒とは異なる。

- ・調査方法 5件法
- ・調査対象 生徒 327名
教師 47名

○因子分析による型分け

生徒、教師共に最終的に3因子を抽出した。ここでも負荷量の相関係数は0.25とした。因子分析によって導き出されたそれぞれの3因子を検討し、次のように共通の要素項目を設定した。

この型名に合わせ調査項目を設定した。(表1)

学級経営等に活かすためには、生徒の対象である教師が学級担任というように、具体的な教師像をあげて調査することが必要であり、その用い方は慎重でなければならない。

(表1) 生徒と教師の心的距離を知るための調査項目

信 頼	生) はなしやすい先生がいる。 教) 話しやすい教師だと思われている。
	生) 信頼できる先生がいる。 教) 生徒から信頼されている。

不 信	生) 先生や学校の都合でしかられていると感じることがある。 教) 学校の立場や自分の対面のために生徒を叱ることがある。
	生) 先生に相談したことが他の人に知られてしまうことがある。 教) 生徒との相談内容を他で話すことがある。
	生) 理由も聞いてもらえず、しかられることがある。 教) 理由を聞かずに生徒を叱ることがある。

相 談 交 流	生) 相談するとすぐに先生は応じてくれる。 教) 生徒の相談にはすぐに応じる。
	生) 相談すると先生がすぐに解決行動をとってくれる。 教) 生徒に相談されたら、忙しくてもすぐに解決策を講じる。
	生) 先生に相談すると忙しくても相談にのってくれる。 教) 忙しくても、時間を作り生徒の相談に応じる。
	生) 生徒との相談を行っている。 教) 生徒の相談にはすぐに応じる。
	生) 休み時間や放課後は先生と一緒に活動している。 教) 休み時間や放課後は生徒と一緒に活動している。

④生徒の実態

○中学生の抱える悩み

中学生はどのような悩みを抱えているのか。問3-10では「中学入学後、悩んだり困ったりしたことはどんなことですか」に対し、多くの生徒が抱える悩みは「成績のこと」が最も多く、次いで「部活動のこと」「友人のこと」と続く。これを男女別で見ると、1位は変わらないものの、2位に男子では「部活動」、女子では「友人」のことが入ってくる。また、学年別でも1位は「成績」のことだが、やはり3年生では2位に「進路」のことが入っている。1・2年生では「部活動」のことが入っている。「いじめ」については性別、学年別ともに10%程度である。

○悩んだり困ったときの解決方法

問3-11「悩みや心配ごとをどのように解決していますか」では、約半数の51.6%の生徒が自分で何とかすると答えている。他の人に相談する生徒は38.8%となっている。その他に回答した生徒は9.5%いるが、その記述を見ると「悩みはない」が最も多く、中には「他人は信用できない」という回答もあった。

○主な相談相手

問3-12「あなたの悩みごとの相談相手は主にだれですか」の回答について、前記の問3-11で他の人に相談すると回答した生徒をクロスさせてみると、17.3%の生徒が担任に相談を求めていることがわかる。また、その他の先生も含めると31%の生徒が教師に相談を求めている。

更に問3-13~17の具体的な悩み別回答ともクロスさせてみると、担任への相談は問3-15「いじめられたり、いじめられそうになったり」で28.1%、「いじめを見たり聞いたり」では45%と高くなっている。一方問3-13「学習や進路」にはもっと高い値を予想したが18.8%にとどまっている。

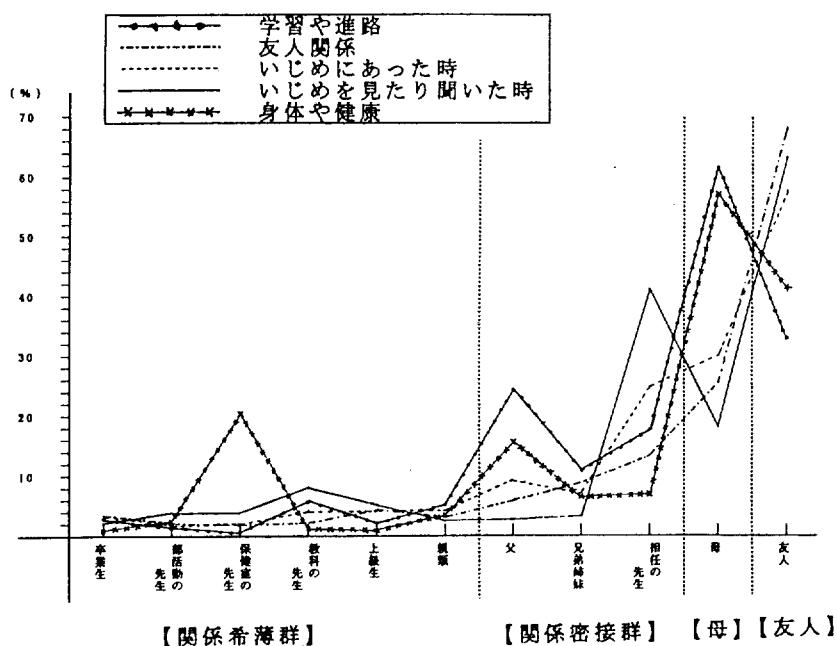
問3-12については、全回答についてクラスター分析によって下記の4つの群に分類した。

1群(友人)	… 友人
2群(母)	… 母
3群(関係密接群)	… 担任・父・兄弟姉妹
4群(関係希薄群)	… 親類・上級生 教科の先生・保健室の先生 部活動の先生・卒業生

この4群に合わせ、問13「学習と進路」、同14「友人関係」、同15「いじめられたり、いじめられそうになった」、同16「いじめを見たり、聞いたり」、同17「身体や健康」という具体的事項についての集計結果を重ねてみたものが(図4)である。生徒にとって、友人や母は最も密接で特別な相談しやすい他人や家族と見ることができ、関係密接群には家族である父や兄弟姉妹とともに担任が入っている。生徒にとって担任の存在が大きいたことがわかる。関係希薄群にはその他の教師が入っている。

全項目で生徒にとって友人や母が最も多く選択される相談相手であることがわかる。しかし、関係密接群にある父や担任については、悩みの項目によっては相談相手として選択される割合が高くなっている。担任では「いじめ」に関する相談相手として、半数近くの生徒が選択している。ここにも「いじめ」問題解決に向けて、教師への期待がうかがえる。一方、関係希薄群にあっては、教科担任が他よりも若干相談相手として選択される割合

【図4】生徒の相談相手



【関係希薄群】

【関係密接群】 【母】 【友人】

が高くなっている。この結果を見ても、教師が生徒の相談相手として選択される可能性が高いと言える。

「身体や健康」については養護教諭を選択する割合が非常に高いが、他の項目に対する相談は低くなっている。後述する、相談の概念を知る項目中の養護教諭との関係や、平成7年度の佐々木良子氏（川崎市総合教育センター）による「保健室における個別指導」の調査結果を見ても、教師あるいは養護教諭自身は生徒がこころの問題を抱え、養護教諭とかかわっている割合が高いと見ている。しかし、生徒はその意識が非常に低い結果となっている。このことから、生徒に内在するこころの問題に気付き、かかわっていくことの難しさがうかがえる。

○教師への相談要求

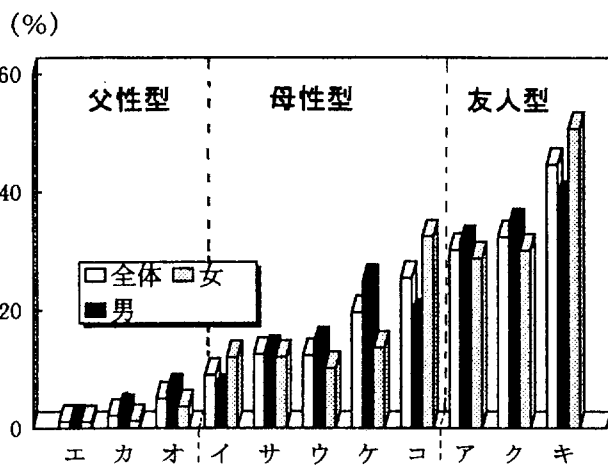
問3-2「あなたは中学校入学後、先生に相談したいと思ったことはありますか」では、34%の生徒があると答えている。この結果を、問3-3「あなたは悩んだり困ったりしたことで、先生に相談したことはありますか」という実際場面にクロスさせてみると、492人中296人が「ある」と回答している。逆に、196人の生徒は何かの理由で相談が実現しなかったことになる。また、「ない」と回答した中の111人の生徒は、現実には何かの相談をしていることになる。つまり、相談を希望した生徒、実際に相談した生徒の数は603人、全体の40%以上となり、この割合は大きいと言える。また、相談の要求を持たない生徒でも、教師の声かけ等、積極的な働きかけによって教師との相談が成立するケースも多いことを示している。

○かかわりを持ちやすい教師のイメージ

問3-1「あなたは悩み事や心配事を相談するとき、どのような先生だったら気楽に相談できますか」についてクラスター分析によって下記のように大きく3つの群に分類し、生徒の傾向を把握した。また、3群に合わせ回答結果をグラフ化した。（図5）

多数の生徒が友人群にある先生像を望んでいることがわかる。父性的な教師は敬遠されている。これを属性別に見ると10%以上の差は学年間には見られないが性別では2つの選択肢で大きな差が見られた。父性群には大きな差がなく、母性群では、「秘密を守ってくれる先生」が13.4%、「頼りになる先生」が11.3%それぞれ男子よりも女子が高くなっている。しかし、この結果は教師の表面的な姿を捉えたものであり、実際にどんなタイプの教師に相談しているのかを探る必要がある。

【図5】求める教師像

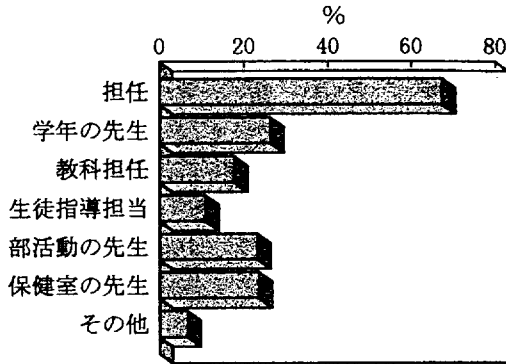


- 1群…父性群（エ朗らか、カきびしい、オ熱心）
- 2群…母性群（イ親身、サ話をよく聞く、ウやさしい、ケ頼りになる、コ秘密を守る）
- 3群…友人群（ア友人的、ク話しやすい、キ気持ちをわかってくれる）

また、具体的な役割を持つ教師別に見ると問3-4「学校生活にかかわる悩みや心配ごとを相談するとしたら主にどの先生に相談しますか」（図6）では、担任の選択が圧倒的である。担任とのかかわりが最も多い中学校にあっては当然の結果とも言えるが、それだけに担任の相

談に関する姿勢が問われる結果とも言える。そして学年の先生や部の顧問、養護教諭がこれに続いている。ここでも10%以上の学年差は見られなかったが、性別では2つの選択肢に差が見られた。「担任」を選ぶ男子が13.3%女子を上回り、逆に「養護教諭」を選ぶ女子が19.9%男子を上回っている。

【図6】役割別



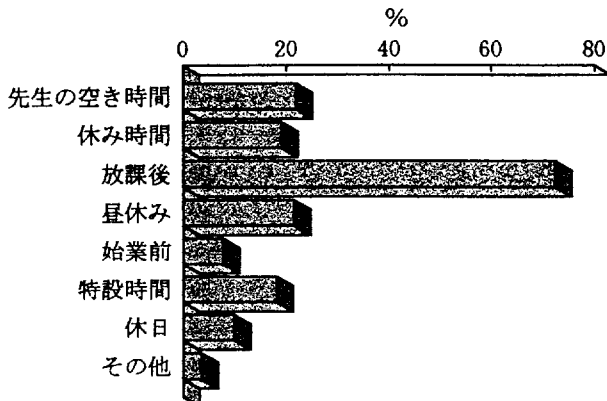
○相談室の現状

各校に設置されている相談室だが、学校教育相談を実施する上でどのような役割を果たしているかを探った。問 3-6「相談室がどこにあるか知っていますか」では、ほぼ半数に分かれた。属性で見ると性別による差はほとんどないが、学年別では1年生で「知らない」と答えた生徒が、2、3年生に比べ20%以上多かった。しかし、2、3年生でも「知っている」という回答は50%台である。また、相談室の利用状況については問 3-5で触れたが、「ある」と答えた生徒はわずか 7.6%にとどまった。利用頻度の低さがわかる。

○相談を望む時間帯

それではどんな時間に先生と相談することを望んでいるのか。問 3-9「先生に相談するとしたら、どんな時間帯がいいですか」では(図7)「放課後」を選んだ生徒が最も多く、「昼休み」「休み時間」など自由時間帯が上位にきている。属性で見ると、女子が「放課後」を望む割合が男子よりも12%高くなっている。学年差は見られなかった。

【図7】相談の時間帯



⑤教師の実態

教師の相談に対する考え方や捉え方、相談活動の実態を探り、学校教育相談が必要なものとして捉えられているのかを探るため、問3及び問4を設けた。問3では主に相談に対する概念について、問4では実際の相談場面でどのような対応をしているのかを明らかにしようとした。

因子分析によって導き出された5因子を検討し、次の要素項目を設定した。

- | | |
|-----|-------------|
| 因子1 | … 相談に対する考え |
| 因子2 | … 養護教諭との関係 |
| 因子3 | … 相談室での個別相談 |
| 因子4 | … 相談活動の問題点 |
| 因子5 | … 相談の機会 |

教師の相談に対する概念を知る5因子23項目について5件法での回答結果を平均値で表した。これを属性ごとに比較し考察した。

○性別による考察

23項目中、有意の差が認められた項目は3項目で、全体的にはほとんど差がない。

因子1の相談に対する考えではT-1「学校教育相談は問題行動の予防や早期発見に役立っている」、T-4「教育相談は、学校教育になじまないと思う」の2項目に有意の差が認められた。T-1では傾向は同じであるが、肯定値が女性よりも男性が約15%高く、どちらとも言えないで女性が10%高くなっている。また、T-14ではまったく思わないが女性よりも男性が10%高いのに対し、あまり思わない、どちらとも言えないでは女性が約14%高くなっている。しかし、相談に対する考え方として、多数の教師が必要かつ有用なものとして捉えていることがわかる。

因子2養護教諭との関係については、性差は見られない。保健室を利用する生徒の中に、心因からくる症状を訴えるものが増えていること、それら生徒に対し養護教諭が対応していることを認識している教師の多いことがわかる。

因子3相談室での個別相談についても、性差は見られない。相談室は生徒にとって周囲の目を気にして入りづらい所だという認識がかなりある。個別相談での相談室の利用については、教師の配慮が必要だと言える。

因子4相談活動の問題点では、T-9「校内で学校教育相談の研修を実施している」に有意の差が認められた。かなり実施しているでは男女とも5%と同じだが、少し実施しているで女性が男性よりも15%低く、どちらとも言えないを含めた否定回答で女性が15%高くなっている。現状の研修実績に不足を感じる女性が多いとも受け取れ

る。また、全体的にはT-7をのぞき中間値である。

因子5 相談の機会では性差がなく、生徒を知るための雑談をする時間や、対応の時間が不足していると感じていることがわかる。

○教育相談研修の有無による考察

属性による考察に加え、相談活動の概念については、教育相談研修の有無によっても考察した。23項目中6項目に有意の差が認められた。

因子1 相談に対する考えでは6項目中5項目に有意の差が認められた。各項目ともかなりあるで18～37%研修経験者が高くなっている。研修経験者の相談に対する考え方が非常に積極的で肯定的なことがわかる。

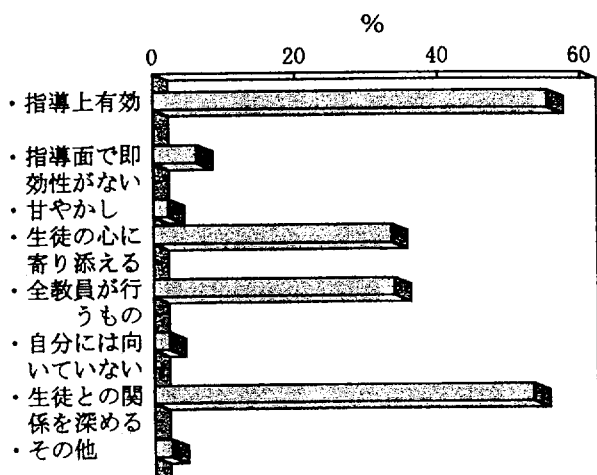
因子3 相談室での個別相談ではT-12「学校教育相談と専門機関での教育相談には違いがある」という項目で、かなりあるで31%研修経験者が高くなっている。研修の積み重ねにより明確に違いを認識しているあらわれが、大きな差になっているといえる。

因子2 養護教諭との関係、因子4 相談活動の問題点、因子5 相談の機会では、研修の有無にかかわらず同傾向であった。

○学校教育相談のイメージ

相談に対する概念については必要かつ有用なものという姿がうかがえた。これを裏付けるように問4-3「学校教育相談のイメージ」については、相談を肯定する選択肢への回答が大部分を占めている。(図8) 属性別では「指導上有効なもの」で男性が女性よりも約14%高く、「生徒の心に寄り添えるもの」では女性が約18%男性よりも高くなっている。男性が実務的傾向で捉えているのに対し、女性は内面を強調する結果と言える。

【図8】相談のイメージ



また、問4-4「相談の対象となる生徒」については、「全校生徒」と回答した割合が75.9%と、この点での教師の認識は一致しつつあるということが言える。

○生徒との対応

「生徒と教師の心的距離」の結果からも明らかのように、生徒とのかかわりに積極的姿勢を示す教師の回答に比べ、生徒の受けとめ方は中間値的回答が多かった。ここでは、教師の具体的なかかわり方について探った。まず、問4-2「生徒の変化」への気づきでは、そのほとんどが顔つきや雰囲気68.8%、行動52.1%、生活態度42.5%だった。また、問4-1「個別指導が必要だと感じたときの対応」では、すぐに話し合うが65.9%だった。しかし、しばらく様子を見る、他の教師に相談するが約30%あることは気になる点である。ケースにもよるが、対応が遅れることは、生徒の内面を知ることを更にむずかしくする場合もある。呼び出し相談やチャンス相談の持つ即応性を活かせる対応がすべての教師に望まれる。

○生徒との相談活動

問4-22「相談を進めるにあたって配慮すること」については、ふだんの生活で気になる生徒に声をかける69.2%、対象となる生徒にチャンスを見つけ声をかける46.2%が多く割合を占め、呼びかけ、チャンス相談が中心になっていることがわかる。積極的なかかわりによって生徒を知ろうとする教師の姿勢がうかがえる。

問4-6「学校教育相談を行う上で困ると思うこと」については、時間の不足を訴える回答が最も多く、62.6%あった。この結果は予想通りだったが、次に多かった回答は、相談に対する知識や経験の不足で39.7%あった。

これに対し、問4-15「学校教育相談を実施していてその対応に困ったとき、主にどのようにしますか」では、(資料16)自分の身近な管理職を含めた教師仲間相談することが最も多いことがわかる。相談の対象としている生徒の様子を知っている同僚を頼ることは当然の結果とも言える。しかし、研修への参加は非常に少なく4%しかない。

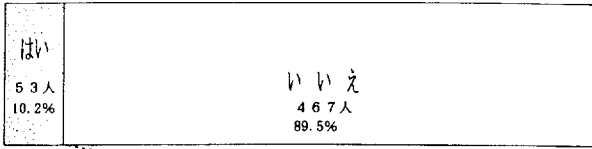
○教育相談研修について

問4-7では1年以上の継続を条件に、「教育相談等の研修を受けた経験」についてたずねた。また、問4-8から問4-10では研修の成果等についてたずねた。その結果が(図9)である。

受講経験者は全体の10.2%である。この結果は、単発的な短期の研修への参加を除いたためだと考えられるが、必要を感じている教師が多い結果から見ると非常に少ないと言える。経験者の動機を見ると、自発的なものが約67%を占めていることがわかる。また、経験者の91.5%が役立っていると回答している。具体的には技法や知識よりも、生徒とのかかわり、自分を見つめ直すといった内面的成果を上げていることがわかる。これは、生徒とのかかわりにおいて、その見方、感じ方という点で非常に重要な意味を持つと考えられる。

【図9】研修経験とその成果

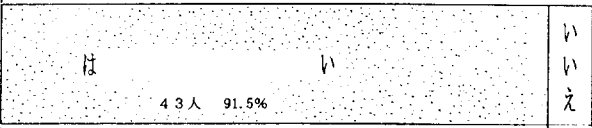
【教育相談研修経験の有無】N=520



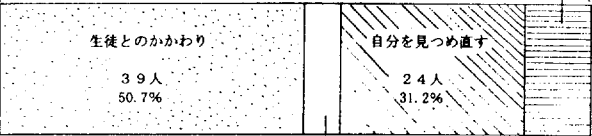
受講理由】2つまでの回答 N=53



役立っているか】N=47



どんな役立ちをしているか】2つまでの回答 N=43

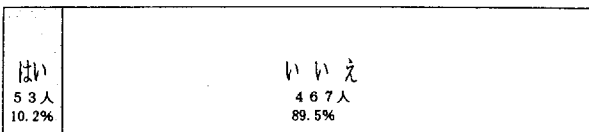


学級経営
5人
6.5%

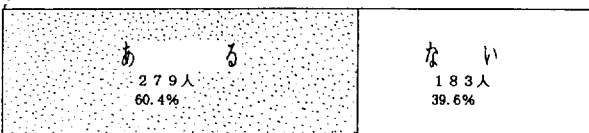
また、研修未受講者の60.4%の教師が今後の受講希望については「ある」と回答している。(図10)

【図10】今後の受講希望

【教育相談研修経験の有無】N=520



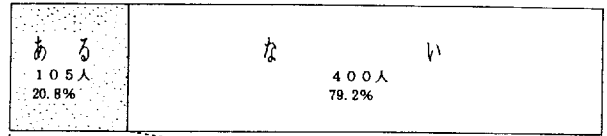
【教育相談研修希望の有無】N=462



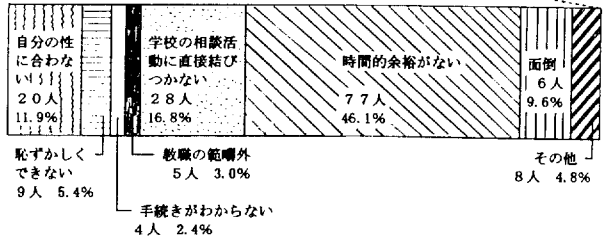
問4-12では「教育相談やカウンセリングの研修についての抵抗感」についてたずねたが、(図11) 時間的余裕がないという理由を挙げた教師が46.1%あった。また学校の相談活動に直接結びつかないと回答した教師が16.8%もあることは注目しなければならない。性に合わない11.9%恥ずかしくてできない5.4%等の結果をも考え合わせ、相談活動の、あるいは研修の啓発のし方を工夫する必要がある。

【図11】相談研修への抵抗感

【教育相談研修への抵抗】N=505



【抵抗の内容】2つまでの回答N=105



恥ずかしくてできない
9人
5.4%

教職の範囲外
5人
3.0%

手続きがわからない
4人
2.4%

問4-23では、学校に相談専門の職員(学校カウンセラー)を置くことについてたずねた。理由は様々であるが学校カウンセラー導入を希望する教師の数が非常に多いことがわかる。(資料17) これまでの考察から、教師の相談活動に対する積極的姿勢がうかがえる中、学校カウンセラー導入の希望がこのように多いことは、時間的な理由の他に、直面する問題が重くその対処に苦慮したり、生徒とのかかわりがうまくいかないといった現実があるのではないとも考えられる。

IV まとめと今後の課題

研究のまとめ

「学校教育相談とは何か」「生徒と教師のかかわり」「学校教育相談に対する教師の理解や活動」に焦点を当て、文献研究や調査の分析・考察によってその実態を知り、次のことが明らかになった。

1. 学校教育相談には予防的・開発的側面と治療的側面の2面があり、むしろ前者の比重が教育の場である学校においては大きい。また、指示的・援助的相談も多い。
2. 学校教育相談活動は、生徒との普段のかかわり方が大きく影響する。かかわり方次第では全ての教育活動が相談活動の一環として活用できる独自性を持っている。
3. 大半の教師は生徒を指導したとき、その理由を話している。しかし、納得していない生徒は多い。また、その値は上級生ほど高い。このことは、心的距離を広げる原因にもなりうる。生徒理解を深めるために、かかわりの工夫が重要な課題である。
4. 教師は生徒とのかかわりにおいて、積極的姿勢を示しているが、その姿勢が生徒に十分伝わっているとは言えない。教師が生徒とのかかわりに自信を持って臨

むことは大切なことだが、常にそのかわりについて省みる姿勢も忘れてはならない。

5. 生徒には性差、学年差があり、教師にも性差、世代差、経験差がある。教師はこの違いを踏まえ生徒にかかわっていくことが両者の心的距離を縮めることにつながるであろう。
6. 中学生の3割以上に先生との相談要求があり、悩みの内容によって相談相手を選択している。また、「いじめ」に関する悩みでは担任に相談する生徒が4割以上いる。教師への期待は大きいと言える。
7. 教師や養護教諭自身は、養護教諭が生徒のこのころの問題に対処することが多くなっていると感じているが、保健室に来室し、養護教諭とこのころの問題と思われることでかかわりを持った生徒の多くはその意識が薄い。
8. 若い教師ほど生徒とのかわりを持つ機会が多く、相談を受けることも多いと感じている。
9. 生徒は、教師の中でも担任への相談希望が強い。
10. 生徒との相談は放課後が最も多く、周囲の目を気にしなくてよい所であれば相談室にこだわるものではない。
11. 学校教育相談は、生徒とのかわりにおいて必要なものとする認識は強い。しかし、継続的相談研修を受けている教師は全体の1割である。
12. 相談研修未受講者には、約6割の研修希望があるが時間的な問題が大きな障害になっている。
13. 相談研修は、教師の相談に関する理論や技法の修得よりも、内面的成果が大きい。

今後の課題

今回の実態調査結果では、教師への相談を希望した生徒、あるいは実際に相談した生徒は全体の4割以上という値を示した。また、いじめに関する相談では担任を選択する生徒の数も多い。一方、教師も学校教育相談の必要性を感じている。さらに若い教師ほど相談を受けることが多いと感じている。しかし、生徒とのかわりでは教師の一方的な姿も見える。

このような結果を踏まえた上で、今後学校教育相談の活性化を図るためには、生徒と教師が信頼関係を築くことが必要不可欠である。生徒の求める教師とのかわりを知り、教師がそのことを踏まえたかわりの工夫をすることも一つの手がかりと言える。特に担任と生徒のかわりはその鍵を握っている。

また、本研究では、生徒と教師の事象に対する両者の認識のズレを心的距離としているので漠然とした尺度となったが、関係密接群（P35主な相談相手）で同グループとなった父親を基準に比較した場合の担任教師というように、比較基準を明確にできる調査が必要であると考

える。更に心的距離の調査を活かした学級経営等の事例研究、学校生活の具体的な場面で教育相談の手法を活かした子どもへのかわりの事例研究等も、今後の課題である。

おわりに

研究推進にあたり、多くの方々にお世話になった。特に調査用紙作成から処理に至るまで、横浜国立大学の岡田守弘教授には大変お世話になった。この場を借り、お世話になった多くの方々にお礼を申し上げたい。

【引用・参考文献】

- 岐阜県教育センター（1988）
「学校教育相談のすすめ方」
- 中山 巖著 北大路書房 1993年
「教育相談の心理ハンドブック」
- 名古屋市教育センター（1993～1995）
「学校の教育相談と教育センターとの連携の在り方」
- 真仁田 昭著 金子書房 1995年
「学校カウンセリング」
- 川崎市総合教育センター（1995）
「保健室における個別指導」

【指導・助言者】

- 横浜国立大学教授 岡田 守弘
(川崎市総合教育センター専門員)
- 横浜国立大学教授 藤岡 完治
(川崎市総合教育センター専門員)
- 世田谷区総合教育相談室統括主任 緑川 尚夫
- 日本学校教育相談学会会長 小泉 英二
- 川崎市立田島養護学校長 木村 巖
- 川崎市立犬蔵中学校長 松井 恭子